



朝四時に眠い目をこすりながら集合したこの日は、五島が熱気に包まれるアイアンマン大会の日です。この大会は海外選手約百人、国内選手約八百七十人が申し込む世界大会で、われわれは学生とともに研究兼メディカルボランティアとして参加したのです。

全国に二百六十ある離島振興法指定有人島のうち、長崎県は全国一多い五十五の有人島を持っています。

常駐で教育、研究

私は離島の二つである五島に常駐し、教育と離島医療研究を行っています。教育としては、長崎大の医学部五年生全員が、

地域担う医療人育てたい

五島に一週間滞在し、中核病院・診療所・県と市の保健行政、福祉の施設で実習を行う「離島医療・保健実習」を行っています。学生の半数以上が五島に来る

の初めて。「信号機があるんですね」など、かなり偏った離島のイメージを聞かされたこともありました。そして、六年生の希望者が五週間滞在学习を行う高次臨床実習も始まり、二〇〇五年には初の離島の研修医が誕生しています。これで、五年生

六年生 研修医という流れが つながりました。

教科書ない分野

研究としては、地域診断や動脈硬化と遺伝子多型、小離島の栄養調査などを行っています。そして今年、アイアンマンレースが及ぼす人体への影響調査も行いました。

アイアンマンレースは、水泳三・八キロ、バイク二八〇・二キロ、ラン四二・二キロと、トップのランナーでも八時間四十分以上かかる過酷なスポーツです。

その中で、スポーツと関連する肺水腫の症例があったこと、またマラソンでは13%に電解質異常が認められた報告などから、「アイアンマンではどれく

らいなのだろう」という興味から始まりました。

レース当日の朝は四時集合で始まり、最後は午前零時ごろまでかかります。特にフィニッシュが始まる午後三時くらいからは休憩する暇もありません。覚悟はしていたものの、倒れそうないい思いました。

医学生、看護学生、病院スタッフなどの協力と頑張りのおかげで、競技者全員のパルスオキシメーター測定と、百人分のレース前後の採血、そして二人の肺水腫発症者を発見することができました。

きつい思いはしましたが、後に競技者や学生からお礼のメールももらい、次への活力となっています。

今までやってきた臨床とは違う、教科書もない分野での仕事は大変ですが、新鮮で面白い毎日です。「住民に喜ばれる研究」「地域の医療・保健・福祉マネジメントリーダーとなりうる医療人を育てる」を信念に、これからも頑張っていきたいと思

なかざと **中里** みお **未央** 20期生、1997年卒



アイアンマン五島長崎大会。トップでゴールした選手を祝福する中尾郁子市長(中央)。右にはパルスオキシメーターで測定をしようとしている、青いシャツを着た長崎大の医学生がいる = 2006年5月28日

離島医療研究所

【私の勤務地】 長崎県と五島市(人口45,976人)が、2004年に長崎大へ寄付を行い誕生した離島・へき地医療学講座。その研究拠点である離島医療研究所は、離島である五島市にある。学生教育と離島医療研究を中心に、多方面で活動している。